

## 東日本大震災救護活動の報告

震災から一月後における石巻医療圏合同救護チームに参加して

岐阜赤十字病院災害救護チーム第 5 班

はじめに

2011 年 3 月 11 日、宮城県沖を震源とする大地震が東北、北関東を襲い、それに伴う津波と共に壊滅的打撃をあたえた。そして、その震災発生から一カ月以上が過ぎ、TV 等のメディアでは各被災地における、復興への活動も報じられるようになってきた。我々は岐阜赤十字病院災害救護チームの第 5 班（以下岐阜チーム）として、被害が最も甚大な地域のひとつである、宮城県石巻市に赴き、同市に設置された石巻医療圏合同救護チームにその一員として参加し、震災から約一カ月となる 4 月 13 日から 3 日間にわたり活動したので報告する。

### 石巻医療圏合同救護チーム

石巻市は仙台から約 50km 北に位置する。太平洋に面し、漁業を産業の中心とする人口約 16 万人、宮城県第 2 の都市である。3 月 11 日の地震により、沿岸部を中心に壊滅的な打撃を受けた。石巻市立病院は石巻漁港の西約 2km に位置し、地震および津波によって、診療は事実上不可能となった。石巻赤十字病院は比較的内陸に位置する蛇田地区にあって、直接的な被害は軽微であったため、同医療圏の医療、救護の中心となる役を公式に委嘱された。石巻医療圏合同救護チームの本部は石巻赤十字病院におかれ、同病院の外科部長、石井正 Dr を本部長とし、活動を展開している。合同救護チームは同医療圏を 14 のエリアの分け、それぞれのエリアには、全国から参加する多くの救護チームを振り分け、各エリアの幹事の元、臨時診療所の運営、巡回診療を中心とした活動を行う。それぞれのチーム活動は、原則として各チームが持ち寄った薬剤、物資等で対応し、自己完結することが求められる。岐阜チームは第 6 エリアの日赤 3 ブロックの一員として配属され、6 エリア幹事愛媛大チームの元、6-B 小エリアが担当する各避難所を中心に、高知大チーム、鹿児島大チーム、産業医大チーム、東北大 Dr(個人参加)他と共に活動した。

### 第 6 エリア、渡波地区

第 6 エリアは石巻港から渡波港、万石浦港にわたる地域で、石巻市の中で、最も被害の甚大であった地域のひとつである。第 6 エリア救護班には 10 チームが参加し、同エリア最大の避難所である渡波小学校（避難生活者約 300 人）に臨時診療所を設置して活動の拠点としている。渡波小学校自体は、石巻湾から約 600m 内陸に位置し、国道 398 号に隣接しているが、津波の被害を直接受けており、周囲は未だ瓦礫の山で、辛うじて車が対面走行できるようになっていた。電気は一部復旧していたが、上、下水道は未だ復旧に至ってはいなかった。6-C エリアは愛媛大チームを中心とする 3~4 チームが診療所の運営を中心に、同校内の避難所、周辺地域を巡回していた。6-B チームは同小学校周辺から比較的離

れている公式避難所および、自主的にできた避難所まで 10 箇所を手分けして巡回し、診療活動のみならず、避難所の衛生環境等をチェックし、本部に報告することが主たる役割であった。

#### 活動内容の記録

4 月 12 日

7:30 に岐阜赤十字病院を出発し、東海北陸道—北陸道—磐越自動車道—東北道—仙台南部道路—仙台東部道路—三陸道を経て、同日 17:30 に石巻赤十字病院到着した。石巻医療圏合同救護チーム本部に登録ののち、本部主催の合同ミーティングに参加した。(この日本部を訪問していた藤原紀香を発見してしまった。ちょっと眼があった?!) ミーティング終了後、金沢日赤チームリーダー宇野 Dr より 6-B エリア幹事の引き継ぎを受けた。この引き継ぎは、各職種同士の間でも、それぞれに行われた。班長として引き継いだ仕事の内容の要点は、次の 2 点であった。

- 1、6-B エリアに属する避難所を各チームに振り分けること。
- 2、石巻漁港近くの松並地区の新たな診療所の運営を引き継ぐこと。

特に、2 に関することは、4 月 11 日、12 日に金沢チームと東北大 Dr が中心に立ち上げたばかりのもので、本部すらすべてを把握していない状態であった。また、鹿児島大、高知大、厚生年金病院の各グループ、東大 Dr 2 名が新たに 13 日から参加し、前日から参加している産業医大チーム、東北大 Dr と共に、6-B チームを構成することをこの時初めて知った。(つまり、前日までに病院で聞かされていた 1~4 班の情報は全く役に立たないことが判明した) この日の引き継ぎは 20:00 にまでおよび、金沢チームは疲労困憊の中を帰還していった。(山形のとある温泉旅館で一泊する予定、と聞かされた。遅くまで引き止め、申し訳ない気持ちでいっぱいであったが、我々にしてみれば、どれだけ話を聞いても不安は解消しなかった。出たところ勝負の状態であることだけはよくわかった。) 松島へ移動し、あらかじめ予約されていたホテルにチェックインした。到着は 20:45 で、慌ただしい夕食ののち、チームミーティングを行った。各人の引き継ぎ事項をチェックし、13 日からの活動方針を決定した。ミーティングは 23:20 までかかってしまった。ちなみに同ホテルには、他の救護チーム、全国からのガス、水道、電気関連の復旧チーム、セブンイレブングループ援助チーム、自治労支援チーム等が宿泊していた。松島自体も被災地で、従業員も被災者なのに、できる限りのサービスで迎えてくれたことが心にしみた。

4 月 13 日 (活動 1 日目)

本格的な活動の開始の日である。

5:30 より朝食をとり、6:30 に松島を出発、7:20 石巻赤十字病院に到着した。本部から、昨夜更新された 6 エリアの最新の情報、今までのチームが避難所ごとに作成してきた、担当エリアのカルテを受けとり、渡波小学校へ移動した。移動の車内から見える震災の爪痕が我々を迎えた。信号が稼働しない交差点では警察官が手旗で誘導しており。河川の両岸には打ち上げられた瓦礫と船舶を認めた。しかしこの後、さらなる光景に言葉失うこと

になる。蛇田地区から渡波地区方面へ向かい、牧山東トンネルをくぐると、そこはまさに別世界で、瓦礫を道の端に寄せて、車両が何とか通行できるようにしてあったが、自宅で生活ができるとは到底思えないような地区であった。上下水道の復旧は皆無であり、衛生状態が悪く、今後 2 次的に感染症等の流行が懸念されると聞いていた。8:40、渡波小学校に到着した。9:00 より、6 エリア合同ミーティングを開始、この日から参加するチームの自己紹介、業務連絡を行った。ミーティング開始直前に震度 2 の余震があり、誰からともなく「おーっ」という声が上がった。

つづいて、6-B エリアミーティングを行った。この日は参加チーム数が多いことから、産業医大、鹿児島大、高知大、厚生年金病院の各チームに、すべての避難箇所を手分けして巡回してもらい、現況を把握することを目的とした。岐阜チームは東北大 Dr、東大 Dr2 人とともに、松並地区の宮城ヤンマーの建物に間借りする臨時診療所（以下ヤンマー）の運営を担当した。松並地区は渡波小学校から 1km ほどのところにあり、ヤンマーは車で 15~20 分のところにある。私自身は本部に残って他チームからの連絡、質問に対応しつつ診療所の状況を見学していた。（診療行為には全く手は出さず、たまに来る子供達に飴を配って機嫌取りをしていた）岐阜チームの実務に関しては副班長に任せたが、連絡を密にし、状況に応じてヤンマー診療所の運営に支障をきたすかもしれない物品や薬の不足に対応できる用意をした。

12:00 ごろから、各チームの巡回の報告があったので対応した。どのチームも精力的に活動しており、昼過ぎにはほとんどが終了し、振り分けた以上の巡視をしていただいた。午後からは、私もヤンマーに合流した。到着してまず感じたのは、付近のにおいが強烈であることだった。次に、沿岸部であることから、浜風が強く、瓦礫撤去に伴う砂埃のひどさは、他の被災地区に比べてもひとときわ激しいものであった。

この地区は水産加工場や小規模な工場が集まっており、そもそもの居住者が比較的少ないのが特徴である。石巻地方卸売市場があり、港に面した土地で、津波を直接受けた地区でもあるため、津波でほとんどの人が避難して、震災直後から被災者がいない、と自治体から判断された地区であった。しかし、震災から 1 週間を過ぎたあたりから被災し、避難していた居住者たちが各避難所等から戻ってきて、自宅あるいは近所のマンション等で生活する人が出てきたようであった。また、もともとこの地区にある工場で働いていた人たちが、日中集まってきて、瓦礫の整理、除去を開始し始めたことから、ゴーストタウン化していたこの地区に人が戻るようになってきた時期でもあった。ヤンマーの近所にある、鈴木自動車という会社が自主的に早くから炊き出し行っていることに金沢チームが 4 月 10 日に偶然気づき、この地区内に約 100 人は生活している人がいることを確認、宮城ヤンマーの社屋を間借りし、素晴らしい速さで診療所を立ち上げたのであった。一方でこの日の朝、本部より内々に、この地区に診療所が本当に必要なのか、そのあたりの状況を探ってほしいという要請を受けていたため、急遽、巡回診療を終えたチームから、松並地区に入ってもらい、周辺の様子を探っていただいた。厚生年金病院チームの熱いパワーが特に印

象深い。

この日のヤンマー受診患者は28人。さらに作業のため、松並地区へ来ている人々は概算で200人以上であることが判明した。14:40 診療を終え、15:00 渡波小学校に各チームが再集合、本日の活動報告を行った。各避難所の様子については、避難生活者が徐々に減少し、みな比較的元気で医療需要も低く、せいぜい週1回の巡視程度で十分であること、代表者と常時連絡が取れる体制になってきたことが判明した。本部に帰って、本日の活動をアセスメントシートとして集計し、情報を本部に集約させた。事務方は救護日誌として別に情報を送っている。この日の各チームの情報を受け、6-Bエリアの活動を巡回からヤンマーの運営に軸足を移すこと、診療以外の活動方針を相談のうえ決定し、6エリア幹事の愛媛大リーダー上野 Dr (同精神科教授) に報告した。また、この日は本部との個別ヒアリングにあたっていたため、合同ミーティング後、本部の石井 Dr、上野 Dr を交え、上記の方針変更を提案し、巡回チームは1つで十分であり、活動はもっと効率化できることを報告した。石井 Dr もヤンマーに強い関心を示し、活動の必要性に納得してくれ、6-Bエリアの活動の方針転換を行うことで一致した。本部から高知大チームリーダー西原 Dr(同消化器内科教授)との幹事交代を打診されたが、活動の継続性を盾に、西原 Dr が固辞された。(結局、緩やかに引き継いでいき、最終的に16日まで活動する高知大に、次の6-B幹事を委譲することに決定した) 19:40、本部を離れ、ホテルへ引き上げた。

ホテルでは夕食後、チームミーティングを開いた。メンバー全員からの報告を聞きとり、本部の方針を伝えた。そのうえで翌日のチームの行動予定とタイムスケジュールを決定し休養した。大浴場の温かい湯は本当にありがたかった。また、幹事委譲に伴い、岐阜チームを引き継ぐ静岡日赤チームに、特別な引き継ぎ事項がなくなったため、15日は17:00には石巻を離れることが可能となった。余裕をもった帰還にするため、最終日の宿泊地の変更につき岐阜に連絡を入れてもらった。

4月14日(活動2日目)

5:30から朝食をとり、6:30に本部へ出発した。朝の松島の光景は美しくとても被災地とは思えなかったが、沿岸には多くの爪痕が残っていた。昨日と同様に必要事項を各自でこなし、東北大 Dr のナビで裏道から渡波小学校へ向かった。8:20には到着できた。

6エリアミーティングののち、6-Bエリアミーティングで本日の予定を発表した。本日の参加メンバーは産業医大、鹿児島大、高知大チーム、東北大 Dr であった。AMは鹿児島大チームに、PMは産業医大チームにヤンマーでの診療をしてもらい、岐阜チームはそのヘルプにまわり、昨日経験したノウハウを伝達した。特に薬剤師間で自主的に確立した約束事に基づく、慢性疾患患者の服薬に対応していくドラッグデリバリーシステム(通称メロンパン)のヤンマー版は、混乱した診療体制の中では画期的であり、今後しばらくの間は継続的に運用されていくことが推測されたため、引き継ぎは必須であった。高知大チームは松並地区が初めてであったので、地区の巡視をしつつ、ヤンマー運営のノウハウを知ってもらうことにした。また、ヤンマーでの診療を周知し、利用を促す活動に必要な基礎デー

夕収集を診療に訪れた患者さん対象に行ってもらった。(さすがに内科の教授がリーダーなだけあって、そつのない準備とアンケートが施行された) この結果、診療所が存在することをそもそも知らない、車が流され移動手段がない、代替となるバス等の公共の交通手段がない(ミヤコーバスという路線バスがあるが、なんと有料営業で、結構バス代が高い)、着の身着のままの避難なので、そもそもお金が手元になく、銀行から引き出す手段もない(ATMが流された、銀行がない、キャッシュカードがない等)、という結論を得た。

午後からは、他チームに診療をゆだね、岐阜チームも松並地区の巡視に出た。途中出会った方々に津波の体験談を聞いたり、生活状況を聞いたりもした。(映画のワンシーンのような経験をした人もいた)そして、ヤンマーの存在を話し、何かの時は訪れることを促した。また、港からわずか100mあたりの建物3Fに、8人で共同生活をしている避難者を新たに発見した。娘さんがアレルギー疾患で服薬していたが、震災後、薬がなく苦しんでいると聞き、早速ヤンマーへの受診を勧めた。その時の診療担当は産業医大チームで、リーダーの斎藤Drは小児科医であったことは幸いだった。いったんヤンマーに引き上げたところ、本部から石井Drが視察に来ていた。よりスペースを有効に活用し、診療所の拡大、機能拡張のために本部から物品等の補充をするので、建物の使用許可について、改めて宮城ヤンマーの責任者と協議してほしい、と言い残し、慌ただしく帰って行かれた。重要な役割を任せられ、困惑した。しかし、こんな時にこそ役に立つのは“教授”という肩書である。高知大西原Drをだしにして、宮城ヤンマーの次長さんと協議交渉し、社屋の今使用している場所については、診療所として自由に使ってくれてかまわない、との言質をとった。こんな状況であるとはいえ、図々しいお願いに対し、快く対応してくれたことに感激した。この日の受診者は18人、周辺で作業する人は概算で、300人を超えていることが判明した。直接受診される患者さんはまだそれほど多くないが、今後、松並地区の日中の人口は、増加の一方となることを考えれば、ヤンマーの存在はその重要性を増すと思われた。14:40、ヤンマーを撤収、エリアミーティングに参加し、明日からは本格的に6-Bチーム全体の活動を診療所中心にすることに決定したことを報告した。この日が活動最終日の産業医大チームから、瓦礫による砂埃や建物倒壊によるアスベストに対する対策の必要性を訴えられたことは、さすがと感じた。

ところで、このミーティングに先立ち、ちょっとしたエピソードがある。廊下で待機していた時、不安そうなまなざしをたたえていた、親子の異様な雰囲気を感じ取った、副班長が親子に声をかけ、ナースの判断で精神科医でもある愛媛大上野Drに相談をもちかけた。息子さんが35歳で自閉症なのだが、避難生活でストレスが増し、さらにサッカーのラモスや俳優の渡辺謙が避難所生活を励ましに訪れ、周囲の雰囲気が異様に盛り上がったことで、エキサイトし、症状が悪化したことが原因のようであった。上野Drの適切な処置で何とか乗り切ったようだが、親子を引きとめ、上野Drに診察を仰いだ岐阜チームのナース達の、ファインプレーであった。それにしても、有名人の慰問、というものも善し悪しだと感じた。

本部に戻って、報告事項を提出し、石井 Dr に宮城ヤンマー側の意向と、診療所運営が軌道に乗ることを直接伝えた。さらにアンケート結果を本部から直接、自治体や銀行、バス会社に申し入れてもらい、住民の預貯金引き下ろしの件、住民の交通の便の改善の件につき交渉してもらおうよう依頼した。18:00 から合同ミーティングに参加した。そこで砂埃による咳嗽患者の増加、下痢患者の発生状況が報告された。さらに、今後、巡回活動から、診療所活動への緩やかな移行、特に国道 398 号沿いは湊小学校、渡波小学校に設置された既存の診療所に加え、ヤンマーを含む 3 か所を中心とすることが正式に発表された。ヤンマーが、救護チーム全体にアナウンスされた瞬間だった。その後、高知大チームへのエリア幹事としての引き継ぎ事項のメモ、資料を渡し、明日からの 6-B 幹事を正式に委譲した。

また、九州に帰還する産業医大の斎藤 Dr から、最後に小児科医として貢献できたことがうれしかった、と伝えられ、私もうれしく感じた。この日は、いつもより早く、19:00 に本部を離れ、ホテルへと戻った。帰り道は、反対車線も大変な渋滞であった。ホテル帰還後、いつもより少しリラックスした気分で食事を取り、いつもより短いチームミーティングを行った。明日の予定とタイムスケジュール、とりわけ、夕方の撤退はできる限り早くする旨、徹底した。

#### 4月14日（活動3日目）

いつもと同じ時間に、食事をとったあと、6:40 にチェックアウトした。フロントで、できる限り提供してくれたサービスへの感謝と、復興後の松島再訪を約束したところ、フロントマン一同が姿勢を正し、“日本三大景観の松島へ足を運んでいただくことを心からお待ちしております、その際はぜひ当ホテルをご利用ください”、と返された。ホテルマンの矜持に心地よさを感じた。本部に立ち寄り、最新情報の確認をしたのち、本日の活動に用いるヤンマーおよび湊、渡波の両小学校におかれた臨時診療所の宣伝ポスター、ビラの作成を行い、ポスター40枚、ビラ120枚を用意した。診療所の設営準備を手伝い、AMの鹿児島大チームの診療をヘルプした。途中、11:00 から始まる自衛隊の配給、炊き出しにあわせて、ヤンマーを離れた。炊き出しや配給所には大勢の住民が集まるからだ。周辺の自衛隊活動場所で、ビラ配り、ポスター貼付し診療所の利用を呼びかけた。自衛隊の方が拡声器を貸してくれるような場面もあった。合計で5か所の配給所をまわり、自衛隊の方にも体調の悪そうな方へ、受診を勧めてもらえるようお願いした。どの隊の隊員も快く応じてくれた。PMは高知大チームと、新たに到着した次の産業医大チームに診療所の運営を任せ、岐阜チームはヨークベニマル（地元のスーパー）のボイラー室のようなスペースで自主的に避難生活をおくる人々に、診療所の存在を知らせた。こんなところで避難生活を送っているのか、と驚かされた。さらにJA渡波の公式避難所にも赴き、診療所の存在を周知した。私設、公式の両避難所を巡回したことで、避難所生活にも差があることを強く感じた。撤収に先立ち、宮城ヤンマー関係者へ、岐阜チームは帰還することを報告、本日までの活動への協力を感謝し、今後も継続して協力してもらおうようお願いした。この日の受診者は28人、周辺には概算で600人近くの人が作業に来ているようであった。14:45撤収した。

最後のエリアミーティングで、報告と各メンバー一人一人があいさつを行い、活動に区切りをつけた。このミーティングの様子を日本テレビのクルーが取材に来ており、ZEROで報道されると知った。しかし、まさかあんな顛末になるとは。

本部に真っ先に帰って、最後のアセスメントシートを提出、臨時診療所の周知、さらには再開した地元医療機関の情報をラジオ等のメディアに乗せることを提案した。本部に最後の挨拶をした。本部の全員が立ち上がって、拍手で送り出してくれた。

16:30 本部を後にした。石巻から新潟まで、まさに疾走した。

22:10 新潟のホテルにチェックイン、汗を流したあと、ビール片手に打ち上げをしながらZEROをみんなで見た。落胆を禁じえなかった。爆睡

4月16日

9:00 新潟の宿を出発、ちょっと(?)したハプニングがあったが、15:30、6人全員無事に帰院した。5日間、天気にも恵まれたことが本当にありがたかった。

考察

合同救護チームでの活動は、1つの駒として動くと同時に、自ら考え、活動をアレンジしていくことを求められる。なぜなら、一つ一つの事柄は、よほど高度な決断が関わらない限り、原則として、自己完結することを求められているからだ。それはチーム内も同様で、1つの目的、意志に基づいて動くとともに、一人一人にプラスアルファの行動が求められる。予定を立てて動くとともに、状況の変化には時として予定を超越した対応が必要だ。今回のチームは、非常にフレキシブルに活動を行い、時としてリーダーの想定を上回る、メンバー一人一人の行動が、エリア内で高く評価されることにつながったと感じる。特に、医師、看護師、薬剤師の活動は何らかの成果につながることもあり、わかりやすいのだが、その裏方として連絡や交渉事をこなす事務方の活動は、地味だが不可欠な重要性を含んでいる。我々のチームはエリア幹事であったので、他チームに気持ち良く活動してもらう目的のため、メンバー各位には、私自身が決めたコーディネートの犠牲になってもらった面は否めない。当初想定していた活動内容と全く変わってしまった、と感じるメンバーがほとんどであったと思うが、何とか責任を全うできた一番の要因は、彼らのフレキシブルな思考と、切り替えの速さに支えられていたことに尽きる。それゆえに、最終日の避難所に赴く時には、メンバー全員生き生きしているように感じられたのかもしれない。

震災発生1カ月後の活動は、当然震災発生当初と全く違う。情報収集と次の活動への準備の性格が強い1班とは、全く違う活動だろうと予想していたが、巡回活動が中心となる2、3、4班とも異なってくることは予想し得なかった。巡回診療が縮小されていくタイミングにあたった当班は巡回活動をこなすと共に、変化する活動内容について、本部への提言を用意する必要があった。幸い他チームも、本部も、我々の提言をよく聞いて、前向きにとらえていただけたこと、さらには提言をもっとよくする知恵を出してもらえたことは、我々には運のよいことであった。しかし、これは時期や場所によって異なることなのであり、すべてのチームがどのタイミングで参加しても、受け身の姿勢ではなく、どうするのが一

番よいのか常に振り返りつつ、自主的に考え、活動していくことが重要と思われた。そのよい例が、“メロンパン”と呼ばれるドラッグデリバリー制度を利用した、ヤンマー版の確立であろう。

今後、石巻が少しずつ復興して行くことで、必要とされる診療体制も変化する事が予想される。今回のヤンマーの体制が確立でされたのも、そうした流れの一環と思われる。例えば今後、学校が再開されることで、避難所が閉鎖され、それに伴う被災者の生活場所の変化がおこれば、多くの人移動を余儀なくされるため、診療体制に大きな影響をもたらすのは想像に難くない。今後救護チームに参加する班はこうした変化に対応し、考えながら活動することが求められる。ただ、活動時間は限られており、速やかな決断と勇気が必要であることもまた確かである。

また、こうした救護活動では、自分の専門科はそれほど重要ではない。むしろ総合的な診療能力と総論的な知識が求められ、そうした中で専門能力を生かす場を求めていくことが必要となろう。ちなみに、私個人は一人として患者さんの診察をしていない。(金沢の宇野Drも、石巻で一人も診察していないと言っていた)金沢チームが立ち上げたヤンマーで、継続して活動していくためには、その必要性を本部に思い知らせねばならなかった。そのために複数のチームでその必要性を確認し、運営をすすめ、被災者に周知、利用してもらうことが必要であった。そのための活動は決して診療活動ではなく、時に選挙活動かと思わされる場面すらあった。

今後、石巻全体がどう変貌し、復興していくかはメディアを通じてある程度わかるだろうが、ヤンマーがどうなっていくかは知るすべもない。それほど遠くない将来に、閉鎖するであろうことしかわからない。金沢チームがまいた種に、我々が水をやって芽を出したが、今後どう育つのか、ちょっと知りたい気もする。そう思うのは、我々が気持ちを込めて活動できたことの証でもあると思う。

おわりに

石井Drから、石巻で起こったことはどんなことでも見て、聞いて、感じたことを伝えてほしい、写真も遠慮なくバンバンとって記録として残し、岐阜でより多くの人に見せてあげてくれ、と直接言われた。その言葉に従い、見て、聞いて、感じたことの全てをここに報告した。3日間という短い期間だが、濃厚な時間であった。その間に、考え、実行に移し、なしたことは少しだけだったとしても、人助けにつながったと信じる。

最後に、救護チームとして、その任務を全うするためにともに活動した、メンバー全員に感謝の意を表します。